

---

# ある組織の日常/非日常

二等海士長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある組織の日常／非日常

### 【コード】

N9589I

### 【作者名】

二等海士長

### 【あらすじ】

とある国に存在する【ある組織】の日常にふれてみました。

以前、書いていた話の再編です。

## (前書き)

注意

この作品はフィクションです。実在の団体、組織とは何の関係もありません。

【朝】

1960年代、冬、航空自衛隊

学校の教室ぐらいの広さの部屋で、40人程の男達が押し込められるようにして2段ベッドに寝ていた。

部屋にある唯一の暖房器具であるストーブは弱々しくて頼りなく、男達は外套を着たまま寝ていた。

午前6時30分。男達は鳴り響いた起床ラッパで跳び起きる。

床やベッドの軋む音すら『寒い寒い』という恨み節に聞こえる中、着替えて半長靴を履く。前日の清掃時に濡れたモップで床を拭いたため、半長靴は凍った床にくっついていていた。

ビシリ……音がして、半長靴が床から離れた。

「公務員は9時5時だったのは、偏見だよなあ」「だよな。夏期日課は六、冬期日課は六三から起きて即時待機だったの」「……もともと、冬期日課の設定は各基地司令所定なので、場所によつては冬でも六起床なのだが。」

「ああ、神様。どうか、冬でも6時に叩き起こされるような基地には転属させないで下さい」

男達は凍えながら点呼に出て、食事に向かった。

【午前】

2000年代、海上自A隊

「着る物は支給されるって、全然足りないじゃん」

汗だくになりながら陸警の教務を終えた学生が、作業服とU首シヤツを脱ぎながら呟いた。

「なんか、汗がピンク色なんですけど」

「血でも混じったんじゃない？ カバの血は汗が混じってピンクらしいし……。逆か、汗に血が混じって、だな」

「そう言えばよお、横須賀でWAVEの士長が他人の制服を盗んで捕まったってな」

情報通の学生が班長達の会話から仕入れた情報を話した。

「やれやれだぜ。退職届を出したくなってきた」

「まだ何も始まって無いぞ」

学生達は糊の効いた青い作業服に着替えて午後の課業へと向かった。

【午後】

2000年頃、陸上自A隊。

富士の麓にある演習場で行われた陸上自A隊とア×リカ軍との合同訓練。その撤収作業をしていた隊員が草むらの中にナニか落ちてるのを見つけた。

「さすがア×リカさんはポイ捨てのスケールもデカイ」  
藪から出てきたのはM-16だった。

「どーするよ、コレ」

「分隊長、貰っちゃいますか？」

「バカを言え。アメリカとの調整役を呼び出して、引き取ってもらえ」

小銃を捨てていくなんて、迷惑な話である。

## 【夕】

2000年代、航空自A隊

夜間訓練の始まり。

夕闇を切り裂くバーナー炎が閃き、爆音が響く。その轟音に驚いて滑走路脇の茂みから野ウサギが飛び出した。

アフターバーナー全開で飛び発つF-15。それを地上から眺めるのは野ウサギだけではなかった。

「パイロットも大変だよなあ」

一人の空士が、携SAMを担ぎながら見ていた。

暗夜を照らすバーナー炎と、静寂を打ち破る爆音がおさまると、空士の頭上を星空が覆う。

やがて、水平線付近に流れ星の群れのようにF-15が現れたのを見て、彼は無線のトーク・スイッチを押した。

「P-1 《パパン》<sup>コンタクト</sup> 目標発見、機数3 《サイズ・スリー》。敵機インバン。交戦開始」

## 【夜】

2005年、7月頃。海上自A隊の教育隊。

私が夜の清掃をしていると、部屋の窓に白っぽい人影が映った。窓が鏡の様に作用し、私の左後ろに立つ白っぽい作業服姿の人間を映していた。

青い作業服を着て掃除にあたっていた私はいぶかしく思い、その人影がいるべき場所を見たが誰も居らず、私は何も見なかった事にした。

後日、部隊に配属された私は、かつての海上自A隊の作業服は白色であったという事を聞いて戦慄した。

### 【深夜】

某A大学校、学生隊。

一人の学生が、疲れた体をベッドに横たえて眠ろうとしていた。

「蟹が食いたいから買って来いってよお、なんで日帰りで千歳まで行かなきゃならんだ」

上級生の無茶苦茶な要求に愚痴を溢しつつ、彼は眠りにつこうとしていた。

しかし、そんな彼の視界にナニかが映った。

(な、なんじゃコリヤア)

周囲に目をやった彼は驚愕した。彼の目に飛び込んで来たのは、自分の眠るベッドから無数の白い手が伸びている光景だった。

金縛りにより身動きもとれない学生に、無数の白い手が迫った。抵抗する事が出来ない彼は

(何か出来るわけでもなし、明日も早いし、寝ちまおう)  
と、考えて寝る事にした。

いつの時代も、夜は明けて朝がやって来た。  
様々な変化や異変、怪異さえも日常に埋没させ、  
今日も『異常な  
し』を報告する。

そんな日常。

(後書き)

ネ夕元

【朝】……………作者の父

【午前】……………二等海士長

【午後】……………一等空士の先輩

【夕】……………一等空士

【夜】……………二等海士長

【深夜】……………二等海士長の兄の同期

以上でお送りしました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9589i/>

---

ある組織の日常/非日常

2011年10月5日11時50分発行